詠む

毎日歌壇

伊藤　一彦　選

エノコログサの種ほろほろとこぼれ落つ優しく接したつもりだったのに　横浜市　谷口　菜月

△評▽エノコログサの歌としても面白いが、人間関係の難しさを歌った作として読めばより印象深い。ほろ苦い思いが伝わる。

二日目のカレーのようにまろやかになるはずでした二人の暮らし　東　京　谷　真澄

△評▽淡々とした「なるはずでした」が逆に重さを感じさせる。上句の比喩も巧み。

自分には優しくなんて言えぬなり甘ったるくて胸焼けがする　川崎市　水　面

満月の草はらにぬて影といふ暗くなりゆくわれを見つめつ　東　京　浅倉　修

図書館の誰も知らない中庭の病葉一つ秋を先取る　霧島市　秋野　三歩

哀愁の中に漂う秋の気がわたしの心をかなしくさせる　相模原市　榎本　ハナ

校庭で育てた西瓜を盗まれてはじめて知った憎しみのこと　長岡市　三月　とあ

満月がすっぽりこの世を包むとき人の心に平和が届く　名古屋市　槇島　千町

墓の前に子は神妙に手を合わすペットのヤモリの初盆なれば　奈良市　久保　祐子

鮮やかに咲けば咲くほど落ちつかぬ普段目立たぬ老百日紅　仙台市　タダヨシフミ

米川千嘉子　選

東京のビルの林のラビリンスナンバープレートの鹿駆け抜ける　奈　良　島　眞澄

△評▽車で東京に来た作者。奈良のナンバープレートには鹿の図柄入りのがある。ラビリンス（迷宮）などへっちゃらだ。

「湖」も「遊びに行く」もみな漢字「彩那」も正確小三夏便り　村上市　杉江　正子

△評▽夏の思い出を書いた手紙。漢字が増えて世界がさらに豊かに色づいたよう。

「ごはんよ」と遊びの子らに母の声ガザにもあつたはずの夕暮れ　岡山市　平尾三枝子

亡き夫に止めてとばかり言ったけど好きだったかも煙草吸う顔　大阪市　鈴木　雅子

外つ国の夕餉にあるか筑前煮きのうはガパオ今日はスンドゥブ　東　京　夏目　そよ

よどみなく座敷の予約取り終えて礼まで言われるAIの玲子さんに　横浜市　島田　和生

水を汲むだけで一日過ぎてゆく国の子思うプールの中で　金沢市　竹内　一二

いつからか　私は母の前にある静かな鏡面静かな涙よ　松山市　丘の紫陽花

くじ引きでメロンを当てた末弟は残念賞の金魚が欲しい　京都市　根来美知代

子どもらに投げ独楽回し教えたら生駒の山に日が沈みゆく　生駒市　宮田　修

加藤　治郎　選

水門が静かにあがり生も死も歓迎される夜明けとともに　東　京　新井　将

△評▽河口付近の水門を想像した。夜明けの海が見えるだろう。生と死、存在の全体が受け入れられる。気高い作品である。

ただいまをまず言うべきではあるのだがおまえの靴を踏んで玄関　枚方市　久保　哲也

△評▽余分な装飾がない。日常の簡潔なスケッチである。苦い情感がにじんでいる。

ソラシドと月はのぼってゆくけれどドシラソ我は家路に向かう　愛　知　横尾　湖衣

「こんなにも！こんなにも！」って言いながら何も持たずに帰ったあの子　神戸市　入間しゅか

新宿区、くくのあたりでつまずいて引きずるように行く歌舞伎町　長岡市　三月　とあ

青春と呼ぶには遅い八月のプールの底に沈んだ鍬　松原市　たろりずむ

河口を漂っても壊れたままだけど溢れるまでに欠片を拾う　平塚市　芝澤　樹

ああ何があったんだろうトンネルにちいさな靴がひとつ落ちてた　川崎市　船山　登

紙パンツ穿いてみたなら心地よくつい365日穿いている　札幌市　橘　晃弘

「お名前はストーン・リバーでいいですね」確かに「石頭」ではない　仙台市　石川　初子

水原　紫苑　選

はばたけぬ舟だとしても　観覧車　あなたの背負う夜空を見せて　大阪市　羽水　繭

△評▽観覧車には独特のイメージ喚起力がある。飛ぶことはできなくても、夜空への夢を捨てない彼ら。

どうしても火星探査機の孤独を思い一晩眠れなかった　枚方市　久保　哲也

△評▽火星探査機の孤独は人類よりも深いのか。そもそも彼は眠るのか。

さうとは気づかれないやうに立つてゐる向日葵のどれかが僕の墓標　甲府市　村田　一広

避雷針たった独りで立っている全人類の生贄のごと　千葉市　芍　薬

初秋の空気を吸って吐いてまた吸った　わたしに花は産めない　東　京　池田　宏陸

寄せる波テトラポッドに乗り上げてこれが空かと深呼吸する　札幌市　橘　晃弘

台風の過ぎ去りし朝みずうみに鳥を浮かべるちからを見つむ　東　京　富見井高志

ミレーの描く農婦のようにじゃが芋をむくときまるくなる母の背な　フランス　小仲　翠太

嘘を吐くときのあなたは少しだけ桃の匂いがして目を伏せる　京都市　よ　だ　か

語り部は原爆樹木のアオギリをさん付けで呼び片足で立つ　山口市　平野　充好

投稿規定

はがき１枚に選者を指定し、未発表の自作を２首・２句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁です。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。

入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。